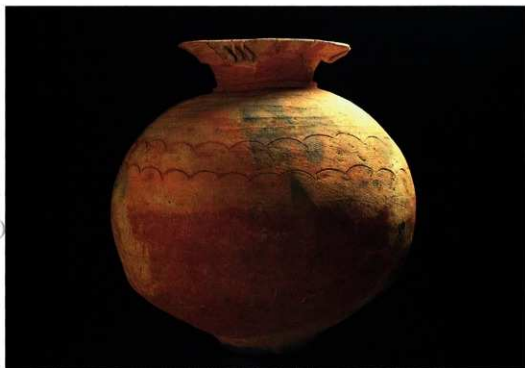


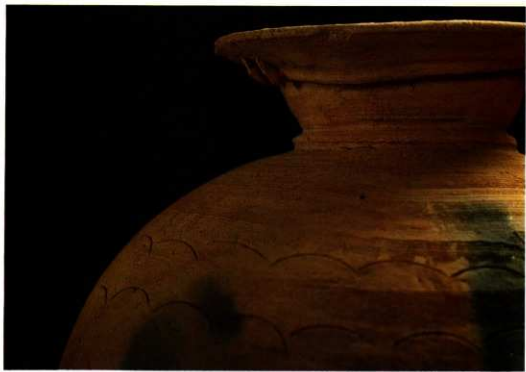
うし づか ひがし  
牛 塚 東 遺 跡

平成5年3月

宇都宮市教育委員会



1号墓出土壶(上:土器1,下:土器7)



1号墓出土瓷部分（上：土器1，下：土器7）

## 序

現在の宇都宮市は、昭和57年に東北新幹線が開通して以来、東京への通勤圏となり、市内の宅地化が急激に進んでおります。このような社会情勢に応じて、住宅地建設が市内各所で行われており、これに先立つ遺跡の発掘調査も年々数を増しております。特に、牛塚東遺跡が所在します雀宮地区は開発の多い所であります。

「雀宮」は、古代においては下毛野氏の氏寺として建てられた「大神主庵寺」が所在し、当時河内郡の中心地の一角を占めており、また、近年においては「雀宮宿」という宿場町として発達した、歴史と伝統のある町です。

この度、雀宮駅に程近い、牛塚東遺跡から出土した壺は、「宮廷式」と呼ばれるように、綺麗に装飾された壺です。また、この壺は東海地方の人々がよく使っていた壺に似ていることから、その当時の人々の交流の広さを教えてくれる貴重な資料でもあります。本書はこれらをまとめたものであり、広くご活用いただければ幸いと存じます。

末文になりましたが、調査においてご協力願いました有限会社中央ホーム、及び調査・報告にあたりご指導頂きました栃木県教育委員会文化課、栃木県立博物館、財団法人栃木県文化振興事業団、本市文化財保護審議委員会委員堀静夫、大金宣亮、橋本澄朗各先生に對しまして、厚く感謝申し上げます次第でございます。

平成5年3月

宇都宮市教育委員会教育長

藤田昌平

## 例 言

1. 本書は宇都宮市雀宮町438-1に所在し、民間宅地造成に伴う牛塚東遺跡の記録保存のための発掘調査報告書である。
2. 本調査は、有限会社中央ホームが費用を負担し、宇都宮市教育委員会が主体となり、平成2年5月21日～同年6月13日まで発掘調査を実施した。
3. 調査面積は約350㎡である。
4. 遺跡地における測量、写真撮影等は糸永郁美、賀来孝代の協力を得て梁木誠、今平利幸がこれにあたった。
5. 遺構、遺物の整理、実測等は、大森八重子、大野節子、賀来孝代、横堀聡の協力を得て、今平利幸がこれにあたった。また、遺物の写真撮影は横堀聡、賀来孝代がこれにあたった。
6. 本書の執筆は今平が担当した。
7. 本遺跡出土の遺物及び図面・写真は、宇都宮市教育委員会で保存している。
8. 発掘調査の関係者は次のとおりである。

					石部正志
				宇都宮市文化財保護審議委員会委員	堀 静夫
			同		大金直亮
			同		橋本澄朗
[事務局]	<発掘調査時>		<報告書作成時>		
教育長	藤田昌平	教育長	藤田昌平	博物館建設推進班長	渡辺 卓
教育次長	田辺雄三	教育次長	近能忠良	博物館建設推進班	白井義雄
文化課長	河越昌司	文化課長	安達光政	同	片山 繁
文化振興係長	藤田秀樹	文化振興係長	北条和久	同	阿部邦男
文化振興係	齋藤全男	文化振興係	湯沢孝夫	同	青木 徹
同	白井義雄	同	白井成志		
同	湯沢孝夫	同	湯沢孝夫		
同	小松俊雄	同	高橋良子		
同	高橋良子	文化財保護係長	定岡明義		
文化財保護係長	定岡明義	文化財保護係	手塚英男		
文化財保護係	手塚英男	同	梁木 誠		
同	梁木 誠	同	小松俊雄		
同	大塚雅之	同	大塚雅之		
同	神野安伸	同	神野安伸		
同	今平利幸	同	今平利幸		

〔調査補助員〕 板橋ミツエ、小野智枝子、菊地誠喜、塩野目新一、高田延子、高野マスエ、林のり子、平山清則、堀江三夫

9. 発掘調査及び報告書作成に関しては、次の諸機関、諸氏の御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(敬称略)

栃木県教育委員会文化課、栃木県埋蔵文化財センター、秋元陽光、阿部知己、五十嵐利勝、石橋知明、大木義明、後藤信祐、小森哲也、小森紀男、斎藤光利、鈴木敏剛、芹沢清八、田口一郎、田代隆、塚原孝一、中村亨史、中山晋、根岸昌子、西川修一、橋本博文、藤田典夫、水野順敏、武藤健三、安永真一、吉野益太郎、渡井英誉

10. 挿図の縮尺は、遺構1/60、遺物1/3で示した。また、遺物実測図番号と図版の遺物番号とは一致する。

11. 断面図基準線は標高であり、平面図の方位は磁北を示す。

## 目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
I 調査の経過と方法	
1 発掘調査の経過	1
2 調査の方法	1
II 位置と環境	
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3
III 調査結果	
1 1号墓	8
2 2号墓	15
3 S I - 01	15
4 柱穴列跡	17
IV その他の遺物	
1 縄文～弥生時代	20
2 古墳時代以降	20
V まとめ	22

## 挿 図 目 次

第1図 遺構配置図	2
第2図 周辺地形図	4
第3図 周辺遺跡分布図	6
第4図 1号墓平・断面図	9・10
第5図 1号墓南周溝遺物出土状態図	11
第6図 1号墓西周溝遺物出土状態図	12
第7図 1号墓出土土器実測図(1)	13
第8図 1号墓出土土器実測図(2)	14
第9図 2号墓出土土器実測図	15
第10図 2号墓平・断面図	16

第11図	SI-01平・断面図	17
第12図	SI-01出土遺物実測図	18
第13図	柱穴列跡測量図	19
第14図	表採遺物実測図	20
第15図	「連弧文」土器実測図	27・28
第16図	その他の「連弧文」土器	30
第17図	「連弧文」土器分布図	33

## 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	7
第2表	SI-01土器観察表	18
第3表	「連弧文」土器一覧表	25

## 図 版 目 次

PL 1 (1)	調査区全景 (西より)	PL 7 (1)	1号墓壺出土状態 (南西より)
(2)	調査風景	(2)	2号墓完掘状態 (南より)
PL 2 (1)	1号墓完掘状態 (南より)	PL 8 (1)	調査全景
(2)	1号墓遺物出土状態 (西より)	(2)	SI-01完掘状態 (南より)
PL 3 (1)	1号墓遺物出土状態 (南より)	PL 9 (1)	1号墓出土土器
(2)	1号墓壺出土状態 (西より)	PL 10 (1)	1号墓出土土器
PL 4 (1)	1号墓壺出土状態 (南より)	(2)	SI-01出土遺物
(2)	1号墓壺出土状態 (北より)	(3)	柱穴列跡出土遺物
PL 5 (1)	1号墓器台脚部出土状態 (東より)	PL 11 (1)	表採遺物 (縄文-弥生時代)
(2)	1号墓器台脚部出土状態 (北より)	(2)	表採遺物 (古墳時代以降)
PL 6 (1)	1号墓高坏出土状態 (西より)		
(2)	1号墓小形壺・器台脚部出土状態 (南西より)		



# I 調査の経過と方法

## 1 調査の結果

平成2年4月21日、工測量設計の上沢氏より、宇都宮市雀宮町に所在する牛坂東遺跡内において民間住宅地造成が計画されていることが、本市教育委員会文化課に通報された。4月25日に本市都市計画課開発係と上沢氏との協議により、26日に立ち合いの確認調査を実施することを決定する。26日にトレンチによる確認調査を行った結果、竪穴住居跡1軒、方形周溝遺構1基が確認された。この結果を基に、5月1日に上沢氏と協議をした結果、5月21日から約3週間の予定で発掘調査を実施することが決まった。また、調査費用に関しては、原因者である有限会社中央ホームで負担し、宇都宮市教育委員会が主体となり、記録保存のための調査を行うことを併せて決めた。

調査は5月21日から開始し、翌月の13日に終了した。

## 2 調査の方法

まず始めに、トレンチ調査により確認調査を行った。この結果、溝状遺構及び竪穴住居跡が確認できたため、その範囲を重機により面的に広げた。第1因は遺構配置因であるが、方形周溝墓が2基、竪穴住居跡が1軒確認できた。その他土坑及び柱穴が多数確認できた。但し、円形及び長方形の土坑のほとんどはイモ穴等の後世のものである。尚、方形周溝墓に関しては、両者とも墓塚が確認できておらず、盛土も削平されてしまっていることから、断定はできないが、状況から低墳丘の可能性が高く、ここでは方形周溝墓として扱う。

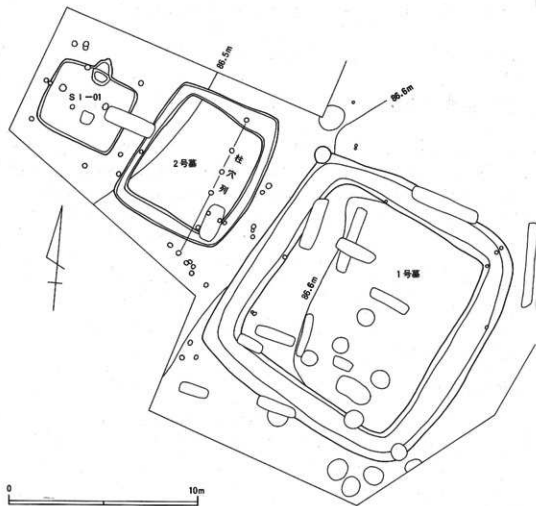
測量杭は任意に5m間隔で設定した。また、標高は水準点までの距離が遠いことから、付近の道路上に設定された標高点を使用した。

基本層序は、1 褐色土（表層）→2 明褐色土→3 黄褐色土（ローム漸移層）の順で、遺構の確認は2の明褐色土下で行った。

### （発掘日誌抄）

- 4月26日 トレンチによる確認調査。竪穴住居跡1軒、方形周溝遺構1基確認。
- 5月15・16日 トレンチ調査の結果に基づき、重機で表土剥ぎを行う。新たに方形周溝遺構を1基確認。
- 21日 ジョレンがけを行い、遺構確認写真を撮る。
- 22日 土坑の掘り下げ、測量杭打ち。
- 24日 1号住掘り下げ開始。

- 25日 1号住掘り下げ、セクション・出土遺物写真、セクショク図作成。2号墓の掘り下げ開始。
- 28・29日 2号墓掘り下げ。セクション図作成。1号墓掘り下げ開始。
- 30日 1号墓掘り下げ、壺・高坏が出土。2号墓セクション写真、平面図作成。
- 6月1～6日 1号墓掘り下げ。
- 7日 1号墓平面図作成。2号墓セクションベルト除去。
- 11日 2号墓清掃後写真。1号住カマドセクション・平面図・写真。
- 12日 1号墓コンター図作成。清掃後写真。
- 13日 調査終了。後片付け。



第1図 遺構配置図

## II 位置と環境

### 1 地理的環境

牛塚東遺跡は宇都宮市街から南方約8km、東北本線雀宮駅から南南東約500mに位置する。本遺跡の周辺の地形を概観すると、鬼怒川の支流である田川と思川の支流である姿川が南流し、両河川に挟まれた地域に宝木台地と沖積低地が形成されている。本遺跡(第2図 〇部分)は、この宝木台地東端の標高約87mに立地し田川の沖積地との比高は約5mである。東方約1kmのところには田川が南流する。第2図からもわかるように、現在はこの台地縁辺上に多数の宅地が立ち並び、当時の面影を残す部分は少なくなっているが、今回の調査区域は、その宅地の合間の現況が畑地となっていたところである。因みに、眼下の沖積地(第2図 〇部分)は現在もほとんどが水田として利用されている。

### 2 歴史的環境

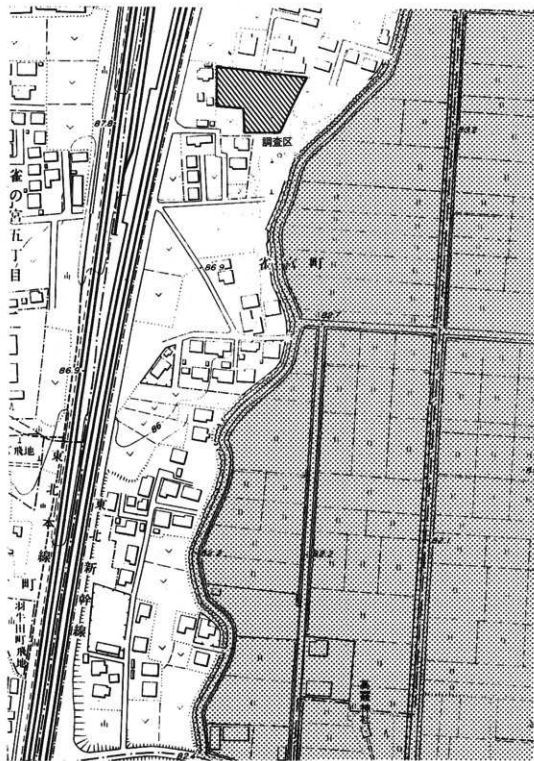
第3図からもわかるように、田川右岸の宝木台地東端には多数の遺跡が存在する。現在は東北線より西は多数の住宅が建ち並び、遺跡の有無はわからないが、開発の波が未だ押し寄せてこない宝木台地東端の遺跡の多さを見ても、この地域が古代から中心的な位置を占めていたことが窺える。以下、時代順に周辺遺跡を概観してみる。

#### 旧石器・縄文時代

本遺跡周辺においては、今のところ目立った旧石器及び縄文時代の遺跡は確認されていない。但し、採集資料として権現山北遺跡(10)からは有否尖頭器や剥片が数点出土し、大日塚古墳(16)周辺からも剥片が出土していることから、既に旧石器時代からこの地での人々の活動が始まっていたことが窺われる。また、縄文時代も市内に約120を数える縄文時代の遺跡があるにもかかわらず、本地域においては数は少ない。分布図よりも西側になるが、本遺跡から周辺に目を転じてみると、西原遺跡、東原遺跡、上坪新田遺跡などがある。

#### 弥生時代

弥生時代の遺跡としては、権現山北遺跡(10)、愛宕塚東遺跡(18)がある。本地域が宇都宮市内の他の地域と異なる点は、この弥生時代の遺跡がこの地域に集中することにある。特に弥生時代後期(二軒屋式)の遺跡が多い。第3図の溜西遺跡(7)の北西約500m程の所に本県の弥生時代後期の標式遺跡となった二軒屋遺跡がある。権現山北遺跡は昭和52年に調査が行われ、この時遺構は検出されなかったが、弥生時代中期-後期にかけての遺物が出土している。また愛宕塚東遺跡は調査はされていないが表採資料により、後期の遺物が出土している。さらに、本遺跡より西方約1.2km-2.5kmの間に後期の土器が表採できる天狗原遺跡、二子塚北遺跡、上坪新田遺跡など



第2図 周辺地形図

がある。しかし、これらの遺跡のほとんどは宅地化の波に襲われ、完全に消滅した遺跡もある。

#### 古墳時代

本地域には、古墳時代前期～中期にかけての古墳が集中し、県内でもかなり早い時期に古墳が築造された地域である。本遺跡の方形周溝墓も前期に属するものである。

まず始めに古墳が造られ始めるのが、本遺跡から南方約2kmに所在する茂原古墳群である。茂原古墳群は大日塚古墳(16)、愛宕塚古墳群(17)、権現山古墳(15)とその周辺の小古墳群からなる。3基の古墳とも前方後方墳である。本県における前期の古墳のほとんどがこの形を採用する。権現山古墳以外の2基の古墳は故久保哲三氏の指導のもと宇都宮大学考古学研究会により調査がなされている。その結果、3基の築造順序は、大日塚古墳→愛宕塚古墳→権現山古墳の順が考えられ、同一系譜のものが規模を拡大していったものと考えられる。また、出土土器の中には東海地方に系譜を持つ壺等があり、本遺跡方形周溝墓出土の壺との関連が注目される。3基の前方後方墳に接続する古墳として、従来は笹塚古墳(22)が考えられていた。しかし、近年調査された、茂原古墳群の南方約1kmに所在する上三川町浅間神社古墳(大型円墳)が、5世紀前半代に位置づけられ、出土土器から笹塚古墳に先行するものと考えられることから、権現山古墳に接続する古墳は前方後円墳に直接移行するのではなく、円墳を介した後、始めて前方後円墳が採用されるものと考えられる。笹塚古墳は全長約100mと県内において最大級の古墳であり、本格的に埴輪を採用した古墳でもある。本墳を含む東谷古墳群はその後、鶴舞塚古墳(23)、双子塚古墳(21)等に引き継がれて行く。但し、この地域における盟主は笹塚古墳から北西約5kmに所在する塚山古墳へと移行する。この他、本遺跡の南西約250mには、画文帯神獸鏡等を出土した雀宮牛塚古墳が所在する。以上のように、県内屈指の古墳が所在する地域であり、これに伴いたくさんの集落が存在したと思われるが、現在確認できているものとしては、溜西遺跡(7)、権現山北遺跡(10)等数カ所にすぎず、すでに市街化された地域にもたぐさんの遺跡があったものと思われる。集落跡において特記すべき点は、大日塚古墳の墳丘下における集落跡、愛宕塚東遺跡、権現山北遺跡出土の土器様相として、東海系色の強い土器(S字状口縁壺等)を含んでいる遺跡が、この地域に集中することである。

#### 奈良・平安時代

周辺遺跡一覧表からもわかるように、この時代の集落跡として確認されている遺跡は、この台地縁辺に多い。しかし、調査されている遺跡は、本遺跡と権現山北遺跡だけであり、その内容は不明瞭な点が多い。権現山北遺跡では平安時代の住居跡が2軒確認されているが、出土遺物は少なく、また、調査区が限定されていることもあり、集落の全体的な様相はわからない。



第3図 周辺遺跡分布図 (1:10000)

No	遺跡名	所在地	種別	時期	備考
1	牛塚東遺跡	雀宮町	集落跡	古墳・平安	
2	十里木古墳	雀宮226-1	古墳	古墳	前方後円墳？
3	綾女塚古墳	雀宮125-18他	古墳	古墳	前方後円墳
4	雀宮東浦遺跡	雀宮町329-13他	散布地	奈良・平安	
5	雀宮駅東遺跡	雀宮町401-2他	集落跡	奈良・平安	
6	牛塚古墳	新富町17他	古墳	古墳	前方後円墳（全長56.7m）
7	溜西遺跡	雀宮1080-43	集落跡	古墳	
8	宇都宮機器南遺跡	下横田町848他	集落跡	古墳	
9	多功神塚古墳群	茂原町1106他	古墳	古墳	円墳2基
10	権現山北遺跡	茂原町261他	集落跡	弥生～平安	
11	茂原北原遺跡	茂原町898-1他	集落跡	奈良・平安	
12	西の前遺跡	茂原町852他	集落跡	奈良・平安	
13	前畑遺跡	茂原町790他	集落跡	奈良・平安	
14	五領山古墳	茂原町	古墳	古墳	円墳（直径18m）
15	権現山古墳	茂原町311他	古墳	古墳	前方後方墳（全長63m）
16	大日塚古墳	茂原町401-2他	古墳	古墳	前方後方墳（全長35.8m）
17	愛宕塚古墳群	茂原町412他	古墳群	古墳	前方後方墳（全長50m）
18	愛宕塚東遺跡	茂原町423他	集落跡	平安～弥生	
19	小菰遺跡	茂原町527他	集落跡	奈良・平安	
20	江面遺跡	茂原町450他	集落跡	奈良・平安	
21	双子塚古墳	東谷町499-1他	古墳	古墳	前方後円墳
22	笹塚古墳	東谷町414他	古墳	古墳	前方後円墳（全長100m）
23	鶴舞塚古墳	東谷町407-1他	古墳	古墳	円墳（直径43m）

第1表 周辺遺跡一覧表

### Ⅲ 調査結果

#### 1 1号墓(第4図, PL2)

調査区の東端, 台地縁辺に位置し, 西に隣接して2号周溝墓が存在する。

台状部の規模は, 南北11m×東西10mの南北にやや長い方形を呈する。南北の中軸線は, N-28°-Eである。地山のローム層まで耕作層が入り, 盛土及び埋葬主体部は確認できなかった。なお, 調査区内には多数の長方形及び円形の土坑が存在し, 特に1号墓に集中して存在するが, いずれも切り合い関係あるいは埋土状況の結果, 1号墓より新しい遺構である。特に長方形土坑は円形土坑を切るものがあり, 円形土坑よりも新しく, その形状から, 当地でよく掘られる芋穴と考えられる。

周溝は全周する。西-北側にかけての周溝は, 平均幅が1.7m, 深さ70cmである。東側は最大で幅2.2m, 深さ85cm, 南側は最大で幅1.8m, 深さ80cmと, 西-北側周溝より幅, 深さとも広く深い。また, 周溝の四隅は幅1.5mと幅がやや狭い。周溝断面は逆台形を呈する。周溝外側での規模は南北13.9m×東西13.2mである。

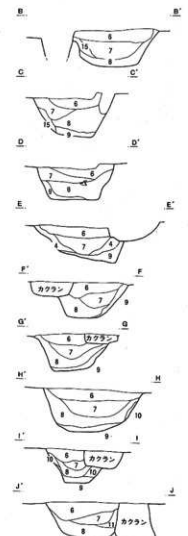
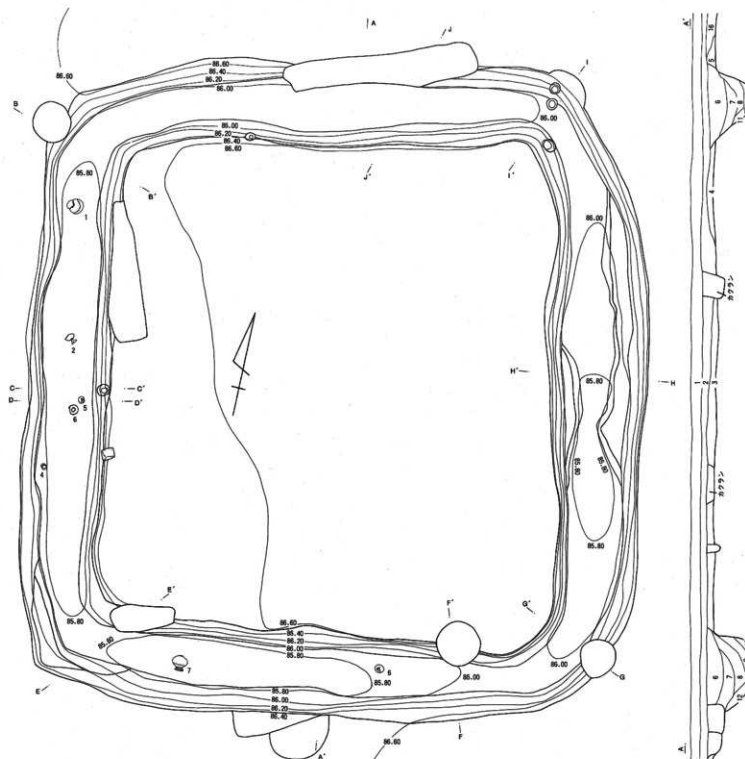
土器の出土は, 南側と西側の周溝に限られる。南側からは, 壺, 高坏状器台の脚部が出土した(第5図)。7は完形の壺で, 周溝底より約10cm程浮いた位置から出土した。断面図からわかるように, 口縁部が外側を向いて, 横倒しになった状態が窺える。6は高坏状器台の脚部のみで, 周溝底より約30cm程浮いた位置から出土した。壺が周溝ほぼ中央に位置するのに対し, 高坏状器台は台状部よりである。正立した状態であるが, 坏部側がやや周溝外側を向く。両者とも層位的には第8層中である。西側からは壺, 器台, 高坏状器台の坏部, 高坏, 小形甕が出土した(第6図)。1は7と同様なほぼ完形の壺である。口縁部1/3が欠損する。北西コーナー付近で, 周溝底より約20cm程浮いた位置から出土した。7程ではないが, 口縁部を外側に向け, 横倒しの状態が窺える。2は, 坏部と脚部が折れた状態で出土しているが完形の高坏で, 西側溝のほぼ中央に位置する。周溝底から約30cm程浮いた位置から出土した。やはり, 口縁部を外側に向けた状態である。5は完形の器台で, 周溝底から約25cm程浮いた位置から出土した。台状部寄りであり, ほぼ正立した状態である。6は5に近接して出土した高坏状器台の坏部である。周溝底より約25cm程浮いた位置から正立した状態で出土した。これと南側溝から出土した脚部は接合する。4は完形の小形甕である。周溝外側寄りの出土で, 口縁部を南側に向け, 横倒しの状態が窺える。いずれも底面から20cm-30cm浮いた位置で, 層位的には第8層上層からの出土である。

これらの出土状況から, 台状部からの転倒というよりは, その場に置かれたものが横倒しになった状態と考えられる。

#### 遺物(第7・8図)

上述したように, 1号墓からは壺2, 器台2, 高坏1, 小形甕1がほぼ完形の状態で出土している。この他に甕の台部が出土している。



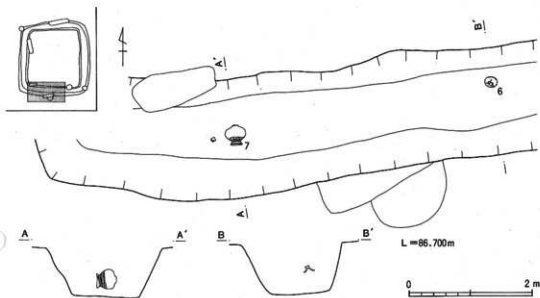


- 1 雑色土 (ロ-ム層少)
- 2 雑色土 (ロ-ム層、ロ-ム層少)
- 3 雑色土 (ロ-ム層、ロ-ム層少)
- 4 雑色雑色土 (ロ-ム層多、ロ-ム層少)
- 5 雑色土 (ロ-ム層)
- 6 雑色土 (ロ-ム層少、炭化物、黒分多<sup>1)</sup>)
- 7 雑色土 (ロ-ム層、中砂<sup>2)</sup>)
- 8 雑色土 (ロ-ム層多、ロ-ム層少、炭化物)
- 9 雑色土 (ロ-ム層、ロ-ム層、黒分<sup>1)</sup>)
- 10 雑色雑色土 (ロ-ム層多、ロ-ム層少)
- 11 雑色土 (ロ-ム層)
- 12 雑色土 (ロ-ム層少、砂の層<sup>1)</sup>)
- 13 雑色土 (ロ-ム層)
- 14 雑色土 (ロ-ム層少、ロ-ム層少、炭化物)
- 15 雑色土 (ロ-ム層多、炭化物)
- 16 雑色土 (ロ-ム層少)

L = A - J = 05.00 m



第4図 1号墓平・断面図



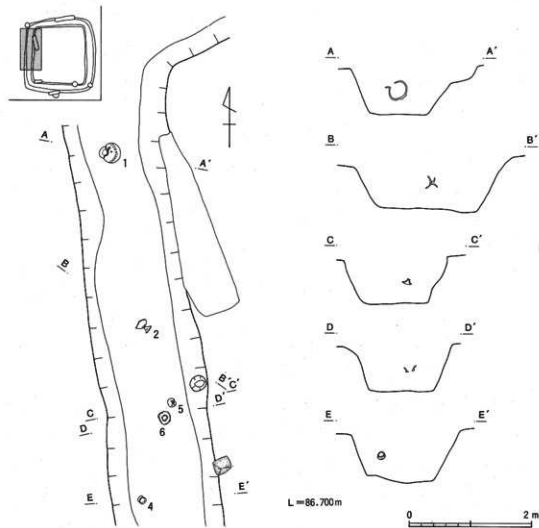
第5図 1号墓南岡溝遺物出土状態図

1は、土師器煮形土器である。口縁部及び胴部の一部が欠損しているがほぼ完形である。寸法は、口径18.3cm、器高32.3cm、底径9.3cmである。器形上の特徴は、下膨れの胴部をもち、やや外傾する頸部から口縁部において強く屈曲し、粘土紐の貼り付けにより複合口縁を呈する。この口縁部外側に3本1組で構成される棒状浮文を3カ所均等に配し、さらにその間に3本の朱線を配す。また、頸部と胴部との境には突帯を巡らす。次に調整上の特徴であるが、胴部全体をハケ調整後ヘラミガキを施し、その後、施文は胴部上半に施される。目の細かいハケ状工具による直線文（1条につき16～18本）が上から5条と胴部中位やや上に1条巡り、その間を連弧文→波状文→連弧文が巡る。波状文はややだれており直線に近い。連弧文はヘラ状の工具により時計回りに施されている。施文順序は、直線文→波状文→連弧文の順で施されている。この他に口縁部内面には羽状の刺突文を施す。赤彩は、胴部下半と連弧文と頸部内外面及び口縁部の一部に施されている。胎土には、石英、輝石等を含み、焼成は良好、色調は赤彩部分以外は淡褐色を呈する。なお、底部付近に焼成後の小孔を穿つ。

2は、土師器高坏形土器である。口縁部の一部が欠けるがほぼ完形である。口径20.8cm、器高13.3cm、底径14.5cmである。器形上の特徴は、坏部が下端に稜を有し、直線的に開く。脚部は「ハ」の字状に開き、小孔が3孔穿たれる。坏部及び脚部外面はハケ後ヘラミガキ、坏部内面ヘラミガキ、脚部内面はハケ後裾部ヨコナデ、なお、坏部内外面に赤彩の痕が残る。胎土に、石英、輝石、長石等を含み、焼成は良好、色調は橙褐色を呈する。

3は、土師器台付臺の台部である。外面ハケ、内面ナデ、胎土に石英、輝石、長石等を含み、焼成は良好、色調は褐色を呈する。

4は、土師器小形甕である。完形。寸法は、口径9.7cm、器高9.1cm、底径5.5cmである。器形は、

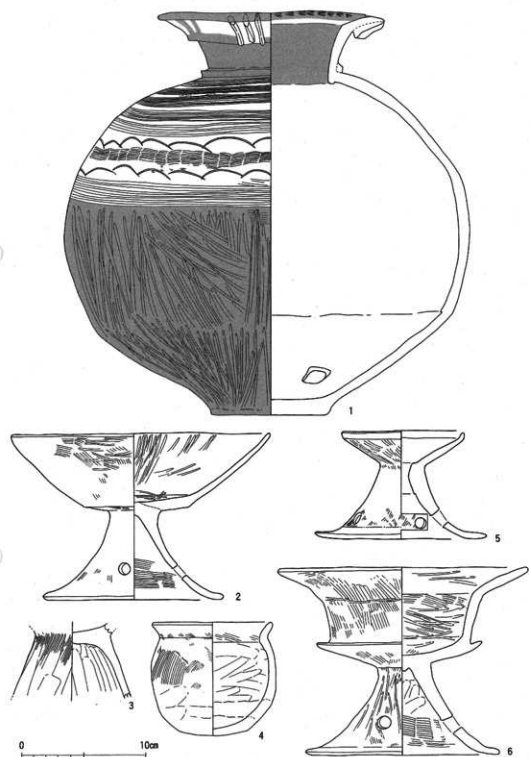


第6図 1号墓西周溝遺物出土状態図

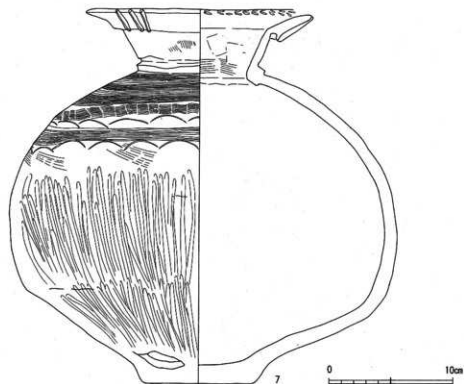
丸底気味の底部から球形の胴部を呈し、口縁部は短く外形する。口縁部内外面ハケ後コナデ、胴部上半外面ハケ後ナデ、内面ハラナデ、胴部下半内外面ナデ。胎土に輝石、白色砂粒を含み、焼成は良好、色調は淡褐色を呈する。

5は、土師器器台形土器である。ほぼ完形。寸法は、口径10.0cm、器高8.7cm、底径14.0cmである。受部はやや内湾気味に開き、口唇部をつまみ上げる。脚部は裾部において大きく開く。穿孔は脚部に4孔（径1.2cm）と受部中央に1孔穿つ。中央穿孔は両側からの穿孔と考えられる。調整は、受部及び口唇部外面と裾部コナデ、受部及び脚部外面ハケ後ナデ、脚部内面ナデ。胎土に石英、長石、輝石をやや多く含み、焼成は良好、色調は橙褐色を呈する。

6は、土師器高坏状器台形土器である。受部と脚部の接点の一部欠損する。寸法は、口径20.2cm、器高15.6cm、底径15.0cmである。受部下端に脚状の突起を有し、一旦直立気味に立ち上がり、口



第7图 1号墓出土土器实物图(1)



第6図 1号墓出土土器実測図②

縁部で大きく外反する。脚部は「ハ」の字状に開き、小孔を3孔穿つ。調整は、全体的にハケ調整が行われた後で部分的にヘラミガキが施され、口唇部及び裾部にヨコナデが施される。胎土に輝石、石英を含み、焼成は良好、色調は淡褐色を呈する。

7は、土師器壺形土器である。完形。寸法は、口径18.2cm、器高30.0cm、底径9.0cmである。器形上の特徴は、下膨れの胴部をもち、やや外斜する頸部から口縁部において強く屈曲し、粘土紐の貼り付けにより複合口縁を呈する。この口縁部外面に3本1組で構成される棒状浮文を3カ所均等に配す。また、頸部と胴部との境には突帯を巡らす。次に調整上の特徴であるが、胴部全体をハケ調整後ヘラミガキを施し、その後、施文は胴部上半に施される。目の細かいハケ状工具による直線文（1状につき14～16本）が上から3条、次に波状文→連弧文→直線文→連弧文が施される。波状文はややだれており直線に近い。連弧文はヘラ状の工具により時計回りに施されている。施文順序は、直線文→波状文→連弧文の順で施されている。この他に口縁部内面には羽状の刺突文を施す。赤彩は、胴部下半に部分的に残る。胎土には、石英、輝石等を含み、焼成は良好、色調は淡褐色を呈する。なお、底部付近に焼成後の小孔を穿つ。

## 2 2号墓 (第10図, P L 7(2))

1号周溝墓の西側に隣接し位置する。

台状部の規模は、南北6.6m×東西5.6mの南北にやや長い方形を呈する。南北の中軸線は、N-26°-Eである。地山のローム層まで耕作層が入り、盛土及び埋葬主体部は確認できなかった。なお、長方形土坑により南東隅が切られている。



第9図 2号墓出土土器実測図

周溝は全周する。溝の幅は平均80cmであるが、西側の溝は50cmと狭い。また、周溝北東隅が広く浅い。溝の深さは平均30cmである。周溝の断面はU字形を呈する。周溝外側での規模は、南北7.8m×東西6.6mである。

土器は、壺の底部破片が周溝南東隅から周溝底より出土している。

### 遺物 (第10図)

上述したように、2号墓からは壺の底部破片が出土した。

1は、土師器壺形土器である。底径が1.7cmと小さい。底部破片であるため、全体的なプロポーションは不明である。外面ヘラケズリ、内面ナデ。胎土に砂粒をやや多く含み、焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。

## 3 S I - 01 (第11図, P L 8)

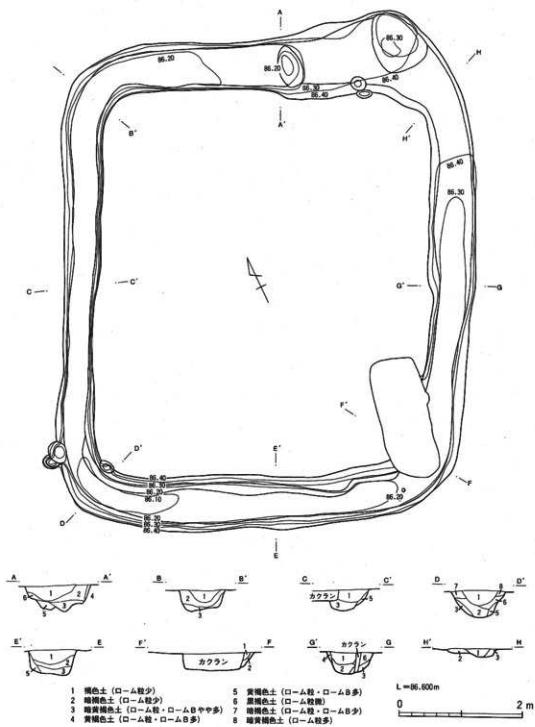
2号墓の西側に隣接し位置する。住居跡東壁中央が長方形土坑により切られ、住居跡中央も正方形土坑により切られている。規模は南北3.8m×東西4.3mで、横長の平面形を呈する。確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝はカマド部分以外は全周し、貯蔵穴かどうかは不明であるが、北東隅に浅い方形の掘り込みがある。床面は平坦で、貼床は認められない。確実に柱穴と認められる穴は確認できなかった。本住居の北側中央には、カマドが設けられている。カマドソデ部は残存せず、焚口部分及び煙道部掘り込みのみが確認できた。煙道部の平面形はV字形を呈し、幅40cm、煙道長50cmを測る。

出土遺物は、土師器坏1・高台坏1・壺1、須恵器坏1・壺1・鉄鏝1点が出土している。3はカマド内の出土であり、2、6、7は床面直上からの出土である。

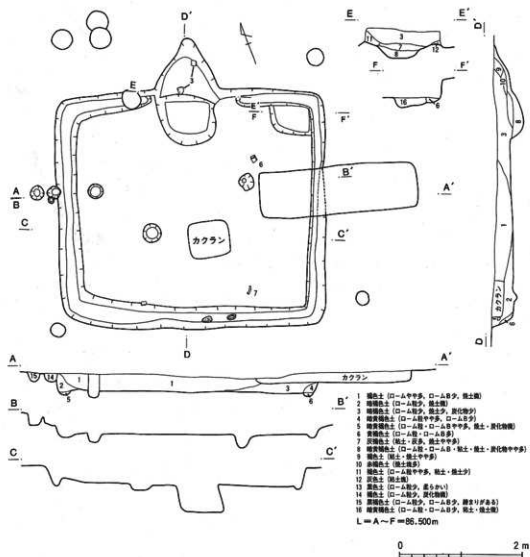
### 遺物 (第12図)

上述したような土器が出土しており、土器についての詳細は第2表に記す。

7の鉄鏝は、全長12.5cm、厚さ0.2cm、着柄部幅が2.8cmで、着柄部は幅の約2/3がほぼ直角に折れ曲がる。重量は40gである。



第10図 2号墓平・断面図



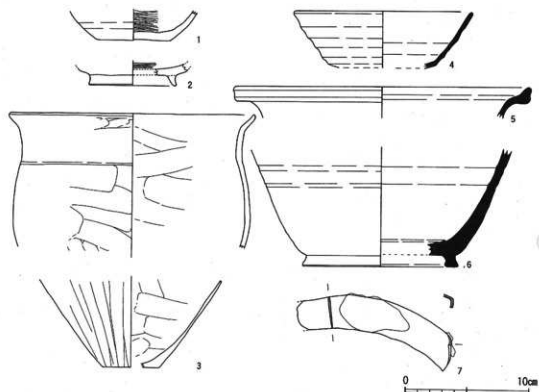
第11図 S1-01平・断面図

#### 4 柱穴列跡 (第13図)

今回の調査において多数のピットが確認できたが、調査面積が限定された中での調査のため、ピット間の繋がり把握することが十分できなかった。このような状況の中で、一直線上に並ぶ柱穴列が確認できたので、それについて記す。

本跡は、2号墓を切るような形で存在し、N-15°-Eの傾きで一直線に繋がる。ピット間の間隔は、P1-P2間1.65m、P2-P3間及びP3-P4間1.2m、P4-P5間3.6mと、P4-P5間はP1-P4に比べると間隔が広い。このことから、P5が別物なのか、あるいはP





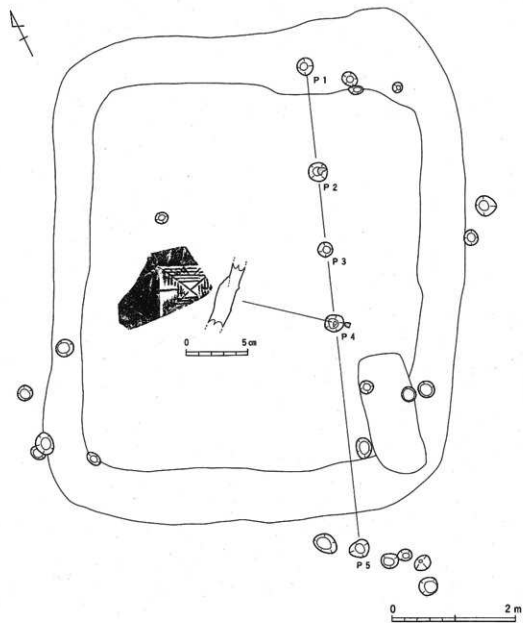
第12図 S1-01出土遺物実測図

No.	器種	寸法 (cm)			器形の特徴	整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土状態	残存量	備考
		口径	器高	底径								
1	杯(H)	-	-	5.9	平底で体部がやや内寄突縁に開く。	ロクロ成形、内面ヘラミガキ、底部切離し後回転ヘラケズリ。	赤色粒	良好	褐色	覆土	1/9	
2	高台杯(H)	-	-	7.0	瓶頸の高台を付す。	内面ヘラミガキ、底部切離し後高台部駁付け。	石英、黒色粒	良好	淡褐色	床直	1/12	
3	壺(H)	19.6	-	4.5	口径が「コ」字状を呈するもの。	内面ヘラナデ、内外面ココナデ、外面上段前方ヘラケズリ、中段一下位、縦方向ヘラケズリ。	石英、小砂粒	良好	赤褐色	蓋	1/10	
4	杯(S)	14.5	4.5	8.7	平底で体部が直線的に開く。	ロクロ成形。	小砂粒、白色粒	良好	青灰色	覆土	1/16	
5	壺(S)	24.0	-	-	外反する口縁部から口頸部を直立させる。	ロクロ成形。	雲母多、小砂粒	良好	灰褐色	覆土		
6	壺(S)	-	-	12.6	台形の高台部を付す。	ロクロ成形。	石英、小砂粒	良好	暗灰色	床直		内面一部に自然釉

第2表 S1-01土器観察表

4-P5間にもう1本別なピットがあったのかは不明である。

尚、P4からは第13図中に図示したような、刻印をもつ土器が柱穴底から出土している。



第13図 柱穴列跡測量図

## IV その他の遺物

以下、遺構に伴わず、表採した遺物について述べる。(第14図)

### 1 縄文～弥生時代

1と2は同一個体と考えられる。両者とも胴部片で、半截竹管による平行沈線文が施され、その施文はやや湾曲をもって施され「木の葉」状を呈する。石英、輝石を含み、色調は淡褐色である。

3は口縁部で、半截竹管による平行沈線文の後、同工具で刺突文が施されている。

4～7は同一個体の胴部片で、LRの原体に燃糸を巻き付けた付加条縄文。白色砂粒を含み、色調は淡赤褐色である。

8は胴部片で、燃糸(糸)が施されている。砂粒をやや多く含み、色調は褐色である。

9は胴部片で、RLの原体に燃糸を巻き付けた付加条縄文。砂粒を含み、色調は褐色である。

10は胴部片で、RLの原体に燃糸を巻き付けた付加条縄文。砂粒、輝石を含み、色調は淡褐色である。

### 2 古墳時代以降

1は土師器坏で、底部が欠損している。口径が14.2cm。体部外面に稜を有し、口縁部が直立する。体部外面ヘラケズリ、口縁部外面ヨコナデ、内面は体部から口縁部にかけてヘラミガキ。胎土に雲母、砂粒を含み、焼成は良好、色調は褐色。

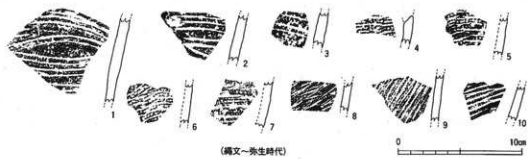
2は土師器小形壺の口縁部破片である。口径が10.4cm。口縁部は「く」の字に屈曲し、口唇部が平らに面取りされている。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面細かいハケ、内面ヘラナデ。胎土に雲母、砂粒を含み、焼成は良好、色調は赤褐色。

3は土師器壺の底部破片である。底部に稜痕が残る。底径が9.6cm。胎土に輝石をやや多く含み、焼成は良好、色調は淡褐色。

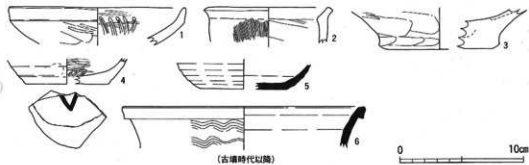
4は土師器坏の底部破片である。底径が6.6cm。平底で体部が内湾気味に立ち上がり、ロクロ成形されたもの。底部切り離し技法は回転糸切り。胎土は緻密で、焼成は良好、色調暗褐色。内面は黒色処理が施され、底部に墨書がみられる。

5は須恵器坏の底部破片である。底径が7.0cm。平底で体部が内湾気味に立ち上がり、ロクロ成形されたもの。底部切り離し技法は回転糸切り。胎土に白色砂粒を含み、焼成は良好、色調灰白色。

6は須恵器壺の口縁部破片である。口径が19.6cm。口縁部に粘土紐貼付けにより折り返し口縁



(縄文-弥生時代)



(古墳時代以降)

第14図 表押遺物実測図

を呈する。口縁部外面には4条の波状文が2段に施されている。胎土に白色砂粒を含み、焼成は良好、色調灰白色。

## V まとめ

本来ならば、1号墓、2号墓、S I-01等の遺構のまとめとすべきところであるが、筆者の力量不足ゆえにそれができなかった。ここでは、この遺跡から出土した特徴的な遺物である壺について若干の検討を加えることにより、まとめにかえたい。

### (1) 1号墓出土壺と「バレス壺」

1号墓からは2個体のほぼ同様の壺が出土している。両者には文様構成及び赤彩の有無に若干の違いがみられる。具体的には、文様構成において、1は上から「横線文→連弧文→波状文→連弧文→横線文」の順であり、7は上から「横線文→波状文→連弧文→横線文→連弧文」の順となる。また、赤彩は、1が胴部下半・連弧文・頸部内外面及び口縁部の一部に施されるのに対し、7は胴部下半の一部に見られるにすぎない。赤彩の有無を考えると1よりも7の方が雑に作られているが、基本的には両者とも東海西部系の影響を受けて作られたと考えられる。

この時期、濃尾平野にその出自をもつと考えられる「バレススタイル壺」(以後「バレス壺」と省略)の影響を受けた土器(倣入・模倣両者)が関東地方にも出現する。以下、この「バレス壺」と1号墓出土土器とを比較してみる。

「バレス壺」の定義については、大参義一氏により次のようになされている。「口縁部の形態が複雑で、口縁端を幅広くとり、ボタン状突起あるいは棒状浮文を加え、胴部上半部・口縁部内面に髹描きの横線文・波状文・列点文などを施した上、それ以外の部分を丹により塗りわけらる。」これをさらに浅井和宏氏が、胴部文様構成に重点を置きA~F類に分類し、その型式変化及び分布の動向について言及されている。簡潔にまとめると、A~F類への型式変化が考えられ、特にE類の(中)新において分布域が大きく拡大し、その中心は「尾張平野(一美濃地方)」が想定される、とのことである。

関東地方にも浅井分類E類の影響を受けた壺が多数見られる。田口氏はこの浅井分類E類の特徴をまとめられているので、それを参考に以下箇条書きにしてみる。

- ① 外反する口縁端部外面には、粘土帯貼り付けにより外面を垂直あるいはやや外斜して広い面をもち、数条の凹線文をめぐらる。
- ② 口縁部外面に3~5本一単位の棒状浮文を3~6単位貼りつける。
- ③ 口縁部内面中位には凸帯がめぐり、上部には刺突による絞杉文を施す。
- ④ 頸部外面には凸帯を有するもの無いものが存在するが、凸帯上には刻み等の文様はほとんど認められない。
- ⑤ 胴部上半には髹描横線文-刺突による山形文-髹描横線文の順で2~3回繰り返す、最下段に刺突の列点文がめぐらる。
- ⑥ 赤彩は、頸部内面・山形文の上・胴部下半に施される。

⑦ 器形は、下影れ。

⑧ 文様以下の部分はハケメが残り、丁寧なミガキはあまりしない。

以上8点を具備したものを典型としている。

本墓出土の壺と上記の要素とを比較してみると、②④⑦⑧は当てはまるものの、それ以外は多少の相違を示す。

具体的に記すと、①③の口縁部に関しては、基本的には折り返し口縁である。但し、一般的な折り返し口縁が、頸部から口縁部にかけて外反し立ち上がるのに対し、本例は頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部に至って大きく外反し、それに粘土帯を張りつけて折り返し口縁としている。このような立ち上がり方は東海西部の広口壺の形状に近似するが、折り返し口縁は関東的であり、「バレス壺」の典型からは逸脱している。

⑤の文様構成も基本的な山形文を使用せず、小型高坏、ヒサゴ壺に多用される連弧文を施していることも「バレス壺」の範疇に入れるには躊躇される。

以上の点を踏まえて考えると、1と7の土器をバレス壺とするには少々問題がある。それでは、この土器をどのように位置づけたいのか、次に考えてみたい。

## (2) 各地における「連弧文」をもつ土器

「連弧文」をもつ土器について、管見に触れた資料を表にしたものが第3表である。

まず始めに、その出自の地域と考えられる東海地方の状況から見てみる。濃尾平野を中心とした東海西部地域では、廻間様式の成立以後は、高坏（小型高坏を含む）・ヒサゴ壺・バレス壺の3器種にこの文様が採用される。但し、相対的には、ヒサゴ壺、高坏への採用が多く、バレス壺は少ない。バレス壺の文様には圧倒的に「山形文+横線文」の組み合わせが占める。参考までに、廻間遺跡・朝日遺跡における各器種の連弧文と山形文の採用率（無文のものを除く）を見ている。

(廻間遺跡)

(朝日遺跡)

ヒサゴ壺 6 点中 (連弧文83% : 山形文17%)	ヒサゴ壺 4 点中 (連弧文75% : 山形文25%)
高 坏 6 点中 (連弧文83% : 山形文67%)	高 坏 1 点中 (連弧文100% : 山形文0%)
バレス壺35点中 (連弧文2% : 山形文98%)	バレス壺 2 点中 (連弧文0% : 山形文100%)

それでは、連弧文を文様構成にもつ各器種の帰属時期はどうであろうか。

高坏におけるこの文様の採用は廻間Ⅰ式4段階から廻間Ⅱ式にかけてみられ、ヒサゴ壺での採用も廻間Ⅰ式後半段階から廻間Ⅱ式にかけてみられるとのことである。

バレス壺には24の愛知県廻間遺跡S B30と25の岐阜県華陽小学校遺跡出土の2点が管見に触れる。廻間遺跡S B30が、廻間Ⅰ式後半段階に位置付けられ、それ以降この遺跡においてはバレス壺にこの文様は見られない。また、華陽小学校遺跡例は共伴物がわからないためはっきりした時期はわからないが、その口縁部形態は古い様相を示す。その他に、同じ東海ではあるが、遠江地方に所在する三沢西原遺跡では、胴部上半に「横線文-波状文-連弧文」を施すものや、口縁

部内面に「波状文-逆弧文」を施すものが見られる。浅井氏はこれらをその胴部文様構成からB類に分類している。所屬時期は、鈴木氏がこれらの土器をⅡ群とした中に位置づけ、このⅡ群の土器群の中に安達分類Ⅲ類のS字帯が共存することから、おぼたけSK-1との平行関係を考えられている。これはほぼ廻間Ⅲ式段階と考えられる。

次に、この文様をもつ土器が他の地域、特に関東地方でどのように展開しているかみてる。第15図はそれを器種毎に見たものである。地域は、この文様をもつ土器の出土した畿内、北陸、東海、中部高地、関東南部、関東北部の6地域に分けた。但し、中部高地は、現在までのところ、恒川遺跡のみであるため、第15図からは外した。当然、赤塚氏や山川氏の指摘するように、古東山道ルートから群馬への東海系土器の波及を考えた場合に、中部高地は重要であるが、現在までのところ、古東山道ルートでも東海西部寄りである恒川遺跡だけであるため、この文様をもつ土器とS字帯等が運動するかについては、今後の類例の増加を待ちたい。尚、関東南部と関東北部との境界を何処までとするかは問題があるが、ここでは、弥生時代後期に弥生町式土器を主体的に出す大宮台地までを関東南部とし、吉ヶ谷・岩鼻両文化圏にあたる比企丘陵からを関東北部とする。また、これらの土器の時間的位置付けに関しては、これらが東海西部（濃尾平野）を出自としていることから、各地の土器編年を交えて、赤塚氏の廻間様式との平行関係を考えてみる。

#### 高坏・小型高坏

##### (北陸地方)

塚オオミクチ遺跡 1は、包含層出土である。坏部外面に横線文と逆連弧文を交互に3段ずつ廻らす。坏部外面に赤彩を施す。包含層中には、元屋敷系高坏等東海系土器が多くみられる。

南新保三枚田遺跡 33は、8号土坑出土で、坏部内面に横線文と逆連弧文を交互に8段ずつ廻らす。田嶋氏分類壺 A1a, A2, F2a 等が共存する。

吉崎・次場遺跡 2, 32は、J, W調査区包含層出土である。32は坏部外面に横線文と逆連弧文を交互に3段ずつ廻らす。2は、裾部で上から順に横線文-連弧文-横線文-列点文-横線文-列点文を廻らす。田嶋氏分類器台 A, I, 壺型土器等が同包含層に含まれる。3は、S-2号土坑出土で、坏部内面に横線文3段の間に逆連弧文を廻らす。台付甕、田嶋氏分類壺 F2a の他、破片であるため断定は難しいが壺 B 3 を含む。

以上、吉崎・次場遺跡 S-2号土坑が壺 B 3 を含むことから、漆町編年 7群に下る可能性も考えられるが、他は概ね5-6群内におさまり、これを赤塚氏の平行関係に合わせると廻間Ⅱ式後半段階とほぼ平行する。

##### (関東南部)

鎌倉公園遺跡 7は21号住出土である。脚部に横線文3段、その間に連弧文を廻らし、裾部緑片に格子目文を廻らす。36は19号住出土の高坏坏部破片で、上段に横線文、下段に1条の逆連弧文を廻らす。37は26号住出土の小型高坏坏部破片である。これらとセット関係をもつ土器として、

No	遺 跡 名	所 在 地	遺構の種類	器 種	道具	図面番号	文献
1	牛塚東遺跡	栃木県宇都宮市	方形周溝墓	壺	B	30	
2	大日塚古墳	◇ ◇	前方後方墳	壺	B	43	註⑤
3	駒場遺跡	◇ 足利市	方形周溝墓	壺	B	31	註⑤
4	鳥久保遺跡	◇ 小山市	竪穴住居跡	壺	B	42	註⑤
5	斗光ヶ丘遺跡	◇ 塩谷町	不明	壺		44	註⑤
6	新保遺跡	群馬県高崎市	大溝	ヒサゴ壺・高坏	B	10, 22	註⑤
7	米沢二ツ山遺跡	◇ 太田市	竪穴住居跡	壺	B	29	註⑤
8	中筋遺跡	群馬県澁川市		高坏	B		註⑤
9	五領遺跡	埼玉県東松山市	竪穴住居跡	壺	B	28, 41	註⑤
10	下道添遺跡	◇ ◇	方形周溝墓	ヒサゴ壺	B	21	註⑤
11	小敷田遺跡	◇ 行田市	河川跡	高坏	B	9	註⑦
12	鎌倉公園遺跡	◇ 大宮市	竪穴住居跡	高坏	B	7, 36, 37	註④
13	南原遺跡	◇ 戸田市	竪穴住居跡	ヒサゴ壺	B	20	註⑤
14	国府岡遺跡	千葉県茂原市	自然流路	高坏	B	8	註⑤
15	大口台遺跡	神奈川県横浜市	不明	ヒサゴ壺	B	19	註⑤
16	三級台遺跡	◇ ◇	竪穴住居跡	ヒサゴ壺	A	18	註⑤
17	恒川遺跡	長野県飯田市	溝	高坏	B	35	註⑤
18	三沢西原遺跡	静岡県菊川町	竪穴住居跡	壺	A	26, 27	註⑦
19	青木遺跡	◇ 浅羽町	土坑	ヒサゴ壺	B	17	註⑤
20	欠山遺跡	愛知県小坂井町	第2貝塚	ヒサゴ壺	A	39	註⑤
21	朝日遺跡	◇ 清洲町	旧河道	ヒサゴ壺	A	5, 15, 16, 40	註⑤
22	廻間遺跡	◇ ◇	竪穴住居跡	壺	A	24	註④
			◇	高坏	B	4, 6	
			◇	ヒサゴ壺	A, B	12, 13, 14	
23	勝川遺跡	◇ 勝川町	S Z 16	ヒサゴ壺	A	38	註⑤
24	華陽小学校遺跡	岐阜県岐阜市	不明	壺	B	25	註④
25	重竹遺跡	◇ 関市	A地点	高坏	B	34	註⑤
26	纏向遺跡	奈良県桜井市	土坑	ヒサゴ壺	B	11	註⑤
27	一塚オオミクチ遺跡	石川県松任市	包含層	高坏	B	1	註⑤
28	吉崎・次場遺跡	◇ 羽咋市	包含層	高坏・壺	B	2, 3, 23, 32	註⑤
29	南新保三枚田遺跡	◇ 金沢市	土坑	高坏	B	33	註①

第3表 「遺蹟文」土器一覧表

(道具：A 貝殻, B ヘウ)



刻目をもつ台付甕や複合口縁をもち胴部上半に斜縄文やS字状結節文を施す壺など従来の土器と  
共伴する。このことから、山川氏は比田井氏のⅠ（古）段階に位置づけている。

**国府間遺跡** 8は自然流路出土の碗形高坏である。坏部外面に連弧文と横縄文を交互に3段ずつ  
廻らす。脚部は裾部との間に段をもち、上段は逆連弧文—横縄文—逆連弧文、裾部にあたる下  
段は横縄文と連弧文を交互に4段ずつ廻らす。自然流路ということもあり、報告書の中では、廻  
間Ⅰ—Ⅱ式の間と時間幅があるが、口唇部の面取り、裾部が大きく開く点などから廻間Ⅱ式平行  
期と考えられる。

（関東北部）

**小敷田遺跡** 9は4区河川跡出土の小型高坏で、脚部を欠損する。坏部外面に横縄文と逆連弧  
文を交互に4段ずつ廻らす。逆連弧文は直線的に近い。弥生土器から土師器と幅広く出土し、時  
期の比定は難しい。

**新保遺跡** 10はB溝出土で、小敷田遺跡同様自然流路であるため時期の比定は難しい。破片で  
あるため、全体的な文様構成はわからないが、横縄文が4段でその間に連弧文を廻らす。連弧文  
はかなり直線的に近くなっている。このことは小敷田遺跡とも共通する。S字寛、刻目をもつ台  
付甕、元屋敷系高坏等その他、小型丸底土器の混入もあることから、廻間Ⅱ式後半段階—廻間Ⅲ式  
平行期と各土器に時間幅がみられる。

ヒサゴ壺

（畿内）

**纏向遺跡** 11は辻土坑2出土で、口縁部に連弧文2段、胴部上半に2段を廻らす。このように  
連弧文のみものは朝日遺跡、廻間遺跡S B45にみられ、廻間遺跡S B45は廻間Ⅰ式後半段階に  
位置づけられている。纏向遺跡例が纏向2式（赤塚福年廻間Ⅰ式3・4—Ⅱ式1）に位置づけら  
れ、この手の土器の初期の段階とほぼ平行し、滝尾平野とのストレートな関係が窺い知れる。

（関東南部）

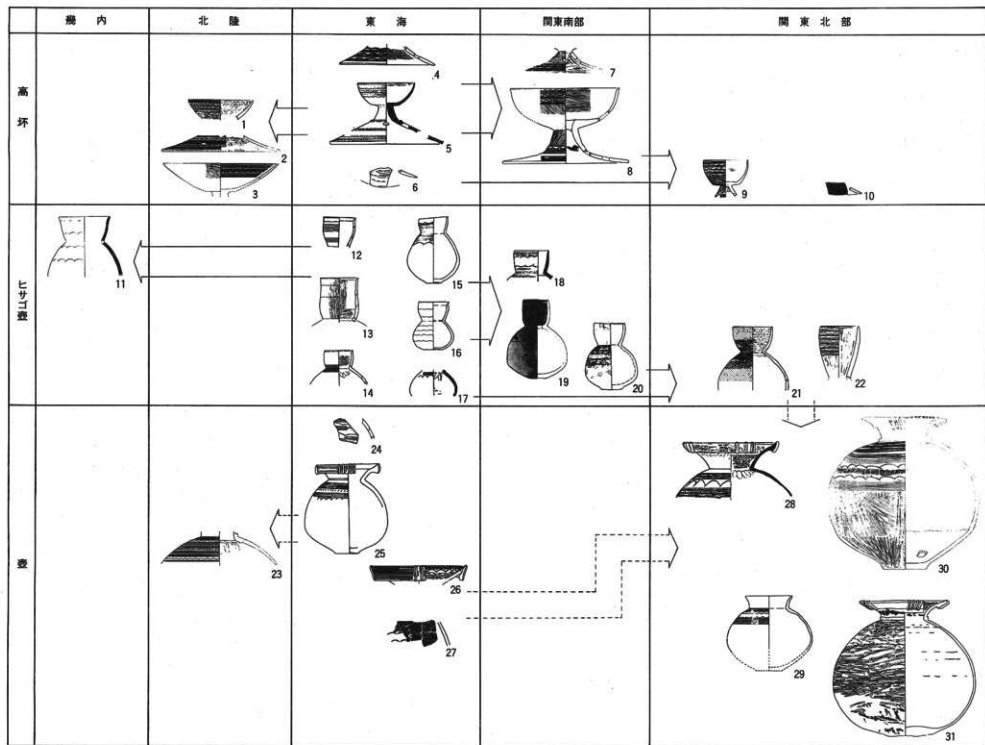
**三取台遺跡** 18は108号住址出土である。口縁部外面に上から横縄文—連弧文—逆連弧文—横  
縄文を廻らす。施文具に貝殻を使用し（廻間遺跡においては、Ⅰ式段階以後は使用されず）、古  
い様相を持つ。甕、台付甕、器台、小型高坏、欠山系・元屋敷系の高坏が出土し、壺、高坏に古  
い様相もみられるが、廻間Ⅱ式平行期に位置づけられると考えられる。

**大口台遺跡** 19は表採資料であるため時期の比定は難しい。口縁部外面に上から連弧文2段—  
逆連弧文を廻らし、胴部上半に連弧文を2段廻らす。外面と口縁部内面に赤彩を施す。

**南原遺跡** 20は3号住出土で、胴部上半に上段が横縄文、最下段に連弧文を廻らす。二重口縁  
壺、器台、元屋敷系高坏等が共伴し、廻間Ⅲ式平行期に位置づけられると考えられる。

（関東北部）

**下道添遺跡** 21は13号墓出土で、胴部下半が欠損する。口縁部から胴部上半にかけて、横縄文



- 1 一塚オオミクチ遺跡
- 2, 3, 23, 32 吉塚・次場遺跡
- 4, 6, 12~14, 24 鹿間遺跡
- 5, 15, 16, 40 朝日遺跡
- 7, 36, 37 鎌倉公園遺跡
- 8 国府岡遺跡
- 9 小倉田遺跡
- 10, 22 新保遺跡
- 11 龍向遺跡
- 17 青木遺跡
- 18 三殿台遺跡
- 19 大口台遺跡
- 20 南原遺跡
- 21 下道添遺跡
- 25 草薙小学校遺跡
- 26, 27 三沢西原遺跡
- 28, 41 五條遺跡
- 29 米沢ニツ山遺跡
- 30 牛塚東遺跡
- 31 駒場遺跡
- 33 南新保三枚田遺跡
- 34 鹿竹遺跡
- 35 榎川遺跡
- 36 藤川遺跡
- 38 欠山遺跡
- 42 烏久保遺跡
- 43 大日塚古墳
- 44 斗光ヶ丘遺跡

图158 「進氣文」土器家瀬田 (1/8)

をそれぞれに廻らした後、口縁部に逆連弧文、胴部に連弧文を廻らす。壺（二重口縁壺を含む）、元屋敷系高坏、器台、鉢、パレス文様をもつ高坏等と共伴し、報告者はこの土器群の位置づけを鎌向辻4号土坑下層平行期としていることから廻間Ⅱ式後半段階と平行する時期が考えられる。

新保遺跡 22は上述した10同様大溝B溝出土である。口縁部上半に8段の横線文、その間に連弧文を廻らす。

## 壺

（北陸）

吉崎・次場遺跡 23は包含層出土である。胴部上半に上から横線文-逆連弧文-横線文-綾杉文-横線文-逆連弧文-横線文を廻らす。時期は限定できないが、先の高坏のところで述べたように、漆町編年5～7群までの間に位置づけられるようである。本例は高坏の坏部同様逆連弧文を採用している点、他のこの手の壺とは様相を異にする。

（関東北部）

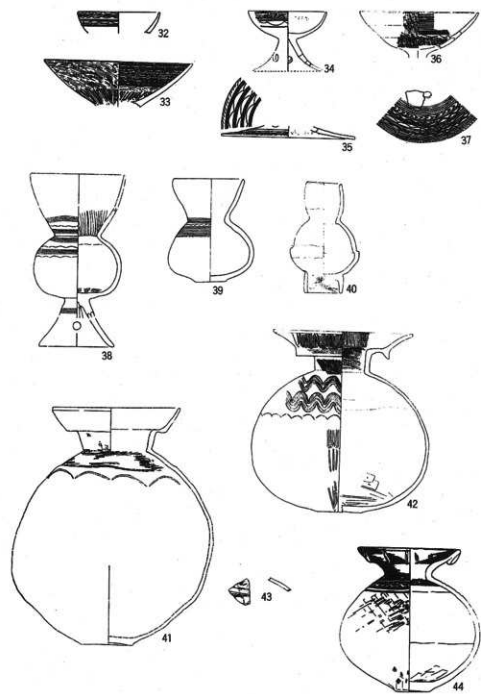
五領遺跡 28は、B区C-6号住出土で、胴部下半は欠損する。頸部から大きく外反する折り返し口縁で、外面に沈線状の横線文を施し、3本1対の棒状浮文を配す。文様は上下横線文間に連弧文を1列施す。赤彩は連弧文上に施される。41は、A区出土で、口縁部が有段口縁をなす。文様は上から横線文、連弧文の順で施される。外面に赤彩が施される。両者とも「横線文+連弧文」の文様構成から東海西部との関連性が指摘されているが、この器形、特に口縁部形態においては、他地域の様相を示す。土器の位置づけに関しては、幾つかの論文の中でなされている。その中で、28の土器を出土したB区C-6号住の位置づけは、大村直氏が五領1式新段階、小出輝雄氏がV期（五領Ⅱ式）に位置づけている。両氏に多少の時間的ずれがあるが、両者とも小型丸底出現以降であることから、逆上っても廻間Ⅲ式2段階平行期までということになる。

米沢ツツ山遺跡 29は、単口縁の壺で、文様は上から横線文-連弧文-逆連弧文-横線文を廻らす。S字壺、二重口縁壺、器台、小型鉢等を出土し、昭和56年シンボ群馬Ⅳ期に位置づけられている。

烏久保遺跡 42はSⅠ-01出土である。口縁部は二重口縁を呈し、胴部は下膨れ気味である。文様は上から波状文2段、最下段に連弧文を廻らす。赤彩は施さない。共伴遺物として、S字壺、器台、元屋敷系高坏等が出土する。S字壺は口縁部の屈曲が外方へ大きく拡張するものがみられ、昭和56年シンボ栃木Ⅳ期に位置づけることができる。

駒場遺跡 31は5号方形周溝墓からの出土である。口縁部は折り返し口縁を持ち、4本1対の棒状浮文を4か所配する。胴部は42に似た形状を呈す。文様は胴部上半に2段に連弧文を廻らす。他の連弧文に比べると爪形のように細かい。ほぼ全体が赤彩される。共伴遺跡は壺、小型壺、器台で、昭和56年シンボ栃木Ⅳ期に位置づけることができる。

牛塚東遺跡 30は本遺跡出土であるが、関東北部におけるこの手の壺の中では形状、文様、赤



第16図 その他の「連弧文」土器 (1/6)

彩の面から見て一番「バレス壺」に近い形態を示し、これらの中では古い形態を示している。

大日塚古墳<sup>30</sup> 43は胴部破片であるため全体像がわからないが、列点文・横線文・連弧文を廻らし、連弧文上には赤彩を施す。共存遺物には、浅井氏E類に分類されたバレス壺が出土しており興味深い。昭和56年シンボ橋木IV期に位置づけることができる。

斗光ヶ丘遺跡<sup>31</sup> 44は表採品である。折り返し口縁をもち、胴部上半に1条の沈線文・連弧文・逆連弧文・沈線文・連弧文・逆連弧文・沈線文を廻らす。但し、本土器の連弧文及び逆連弧文は、棒状工具により連続して描かれている。この点は、他の連弧文の描き方と異なり、文様の描き方までが在地でアレンジされたものと考えられる。

これら30・31・42～44は本県出土で、いずれも昭和56年シンボ橋木IV期に位置づけられる。橋木IV期はすでに定型化した小型丸底鉢<sup>32</sup>が出現した段階であることから、廻間Ⅲ式2～4段階に平行する時期が考えられる。

以上、各器種毎に分布と所属時期についてみてきたことを、以下にまとめる。

① 「連弧文」をもつ高坏・ヒサゴ壺は、他の東海系土器と同様、畿内・関東にかけて広範囲に見られるのに対し、壺は、東海（濃尾平野・遠江地方）と北陸に若干見られる以外、関東北部に多く見られる。

② 時間的には、纏向遺跡（ヒサゴ壺）、鎌倉公園遺跡（高坏）のように、廻間Ⅰ式後半段階平行期に位置づけられるものもあるが、概ね、赤塚氏のいう「第2次拡散期」以降である。但し、関東北部における壺に限れば、廻間Ⅲ式2～4段階平行期である。

③ 高坏・ヒサゴ壺は、東海西部（濃尾平野）からの搬入あるいは模倣のものが多いのに対し、壺は、口縁部形態が折り返し口縁や有段口縁で、文様も28、30以外横線文の欠落や波状文との組合せ、赤彩の有無など多様であり、各遺跡において、色々な要素を取り入れ独自に創作されている。

### (3) 1号墓出土壺の位置づけ

1号墓出土壺の位置づけを行う前に、簡単に本墓出土の壺以外の器種についてみてみたい。

2の高坏は所謂「元屋敷系高坏」の範疇に入り、県内でも三王山南塚<sup>33</sup>2号墳、谷近台遺跡<sup>34</sup>2号住、上原東遺跡<sup>35</sup>K T-13号住などから出土しているが、本例のように脚部が大きく開く例は、群馬県前橋市荒砥北原遺跡<sup>36</sup>1号周溝墓、高崎市元島名将軍塚古墳<sup>37</sup>が挙げられる。大本である廻間遺跡における高坏の変遷をみると、廻間Ⅲ式期以降にこのような脚部が大きく開く高坏が見られるようになる。

5の器台も高坏同様脚部が大きく開くタイプで、その他には受部口唇部が揃まみ挙げられている点に特徴がある。類例としては、本県赤羽根遺跡<sup>38</sup>99号住、群馬県高崎市鈴ノ宮7号周溝墓、茨城県志筑遺跡<sup>39</sup>13号住などが挙げられる。

6の高坏状器台は、無意である点と鐙状部が上向きである点に特徴がある。類例としては、奈

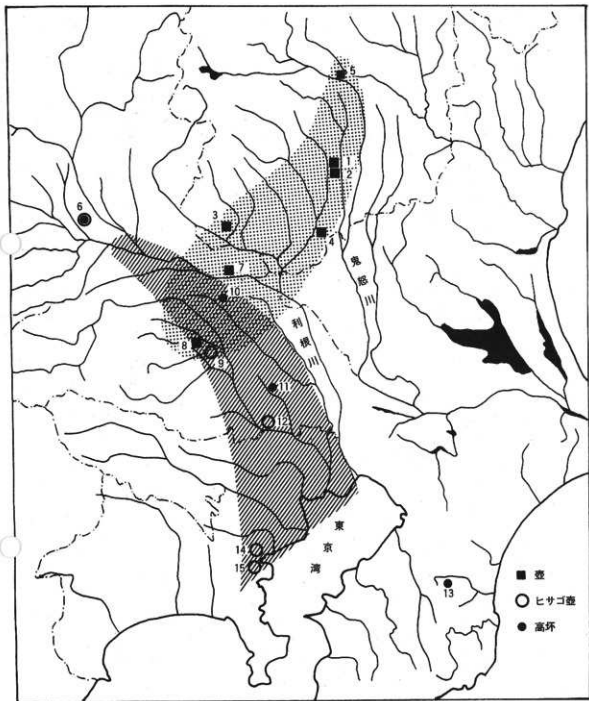
良県纏向遺跡東田地区南溝、埼玉県下道添遺跡11号住、同県諏訪山遺跡5号住、茨城県境松遺跡10号・34号住などが挙げられる。本例は脚部の開き方は諏訪山遺跡例に近似するが、坏部が深い点は下道添遺跡例に近い。尚、纏向遺跡例は纏向3式期に位置づけられており、この手の土器の中では一番古手に属する。

以上、他の遺跡の類別から考えると、これらの土器は、小型精製土器群成立以降で長瀬の高坏出現以前に位置づけられ、56年シンボゾウム栃木Ⅳ、廻間Ⅲ式平行期に位置づけられる。

以上の時間的位置づけを踏まえて、最後に本題である30の土器についてまとめてみる。28-31、41-44の中で古い形態を示すと考えられる30と24、25とは直接結びつくのであろうか。25の所属時期がはっきりしない現時点では結論を出し難いが、廻間遺跡での連弧文と山形文の採用比率でもわかるように、本貫地では「バレス壺」の文様と連弧文はほとんど採用されず、ヒサゴ壺の文様のなかに多く見出せる。24などは時間的にも廻間Ⅰ式段階であり、関東北部の壺が廻間Ⅲ式平行期であるのに対し、一型式ほどの時間差がある。当然、濃尾平野でのこの手の文様をもつ壺の類別が増加すれば結論も自ずと変わってくるが、現時点では直接的な影響下に関東北部のこの文様をもつ土器が成立したとは考えにくい。これに対し、同じ東海ではあるが、本貫地から離れた遠江地方の三原西原遺跡例は、本例と時間的にはほぼ平行する廻間Ⅲ式段階である。全体像がわかる資料がないのが残念であるが、文様構成が「横線文-波状文-連弧文」の組み合わせが見られ、本例の連弧文間に波状文を配する点と共通性を見出せる。42も同様に「波状文-連弧文」の組み合わせが見られるが、横線文は欠落する。資料的に三原西原遺跡例のみから判断はできないが、30及び42に関しては、遠江地方との何らかの関連が指摘できそうである。因みに、本遺跡に近い愛宕塚古墳からは、バレス壺の口縁部と同様の作り方で外面が凹線文ではなく波状文を廻らす土器が出土しているが、これと同様の土器片が三原西原遺跡の中にも見られる。また、直接は関係ないが、愛宕塚古墳に近接する大日塚古墳出土のバレス壺は横線文-山形文間に綾杉文を配している点、他のバレス壺と比べ異質である。この手の土器は静岡県清水市下野遺跡、群馬県大泉町御正作遺跡など今のところ数例しか挙げられない。その下野遺跡は遠江地方に属する。散えて文様構成の点にだけついてみれば、遠江地方と本遺跡周辺地域との共通点が見出せる。但し、愛宕塚古墳でも牛塚東1号墓においても、畿内的あるいは南関東的な土器様相もみられることから、一元的な遠江地方からの影響とは当然言えない。

次に、時間的な位置づけであるが、田口氏は28をバレス壺A-Ⅲ類に属し、中様式(田口氏S字壺Ⅲ・Ⅳ期)に位置付けている。そして、この時期の関東におけるバレス壺は「各地域でバレス壺に対する意識の変化が独自に進行した」段階とし、「山形文+横線文」をもつバレス壺にも変化が生じてきていることを指摘している。五類遺跡出土の28と本遺跡出土の30を比較するならば、30も田口分類A-Ⅲ類に比定され、時間的にも中様式の範囲内に位置付けることができる。それはすでに、濃尾平野ではバレス壺が作られなくなってくる時期でもある。

最後に「連弧文」壺の分布についてみてみる。第17図からもわかるように、関東において今の



第17図 「道風文」土群分布図

(国内番号は第3表Noと一致)

ところ、五領遺跡の所在する比企地方から、本県の県南・県央にかけてみられる。このことは、この範囲が一つの交流圏と捉えることができ、さらにそれは、情報伝達の遺筋をも表しているといえる。大きな土器の流れとしては、西川氏や山川氏の指摘するように東京湾岸から群馬県地域に至る荒川ルート・古利根川ルートが考えられている。今回検討をした「連弧文」をもつ高坏・ヒサゴ壺もこの流れと同様の動きを見せる。しかし、「連弧文」壺は五領遺跡の所在する比企地方がこのルート上に載るもの他はこれから外れる。この「連弧文」壺の分布範囲が、牛塚東遺跡の所在する栃木県中部への情報の遺筋を物語る資料の1つと成りえるのではなかろうか。1号墓出土壺はパレス壺に似せようとはしているが、別の要素が入り混じり模倣しきれていない。そこに「濃尾平野」の直線的な影響を見出すことはできない。しかし、この壺を作るためにはどこからかこの情報を得なければならぬ。この情報を身近に持っていたのが古利根川ルート沿いの人々である。すでに、このルート沿いには、赤塚氏のいう「第1次拡散期」以来、東海系の土器が流入しているのである。尚、30、31、44など口縁部形態が折り返し口縁である点は関東南部の様相を示しており注目される。

以上、「連弧文」土器にだけ焦点を当てて若干の検討を試みたが、当然、他の器種との関連、さらには土器だけではなく社会構造の変化等を含めての検討を加えなければ本当の意味での「人の移動」を捉えることはできない。今後はこれらの事も視点に加えて検討を進めていきたい。

(註)

- ① 大参義一 1968「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』XLV II
- ② 浅井和宏 1986「(宮廷式土器)について」『欠式土器とその前後』第3回東海埋蔵文化財研究会
- ③ 田口一郎 1987「パレス・スタイル壺の末裔たち」『研究報告編』第3回東海埋蔵文化財研究会
- ④ 赤塚次郎 1990『題間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- ⑤ 加藤安信ほか 1982『朝日遺跡』愛知県教育委員会
- ⑥ 岐阜市教育委員会 1979『岐阜市史』資料編 考古・文化財
- ⑦ 鈴木敏則 1985『三沢西原遺跡』菊川町教育委員会
- ⑧ 安達厚三、木下正史 1974『飛鳥地域出土の古式土師器』考古学雑誌60-2
- ⑨ 山川守男 1991「パレス文様小型高坏にみる外来系土器の様相」『埼玉考古学論集』
- ⑩ 松任市教育委員会 1987「松任市一塚オオミナクチ遺跡」
- ⑪ 金沢市教育委員会 1984「金沢市南新保三枚田遺跡」
- ⑫ 田嶋明人 1986『津町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- ⑬ 石川県埋蔵文化財センター 1987『吉崎・次場遺跡』
- ⑭ 諸墨知義ほか 1984『鎌倉公園遺跡』大宮市遺跡調査会
- ⑮ 北田井克仁 1987「南関東出土の北陸系土器について」『古代』第83号 早稲田大学考古学研究会
- ⑯ 小久貫隆史ほか 1993『国府間遺跡群』長生郡市文化財センター



- ⑭ 吉田修ほか 1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- ⑮ 佐藤明人, 真下高幸 1986『新保遺跡Ⅰ』群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ⑯ 石野博信ほか 1976『龜向』奈良県橿原考古学研究所編
- ⑰ 和島誠一ほか 1965『三殿台』横浜市教育委員会
- ⑱ 安藤広道, 鹿島保宏, 鈴木重信 1992『大口台遺跡』寄附資料 横浜市埋蔵文化財センター
- ⑳ 1982『南原遺跡』『新編 埼玉県史』資料編2 原始・古代 埼玉県
- ㉑ 坂野和信 1987『下道浜遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- ㉒ 金井塚良一 1963『五領遺跡B区の発掘調査』『台地研究』No13
- ㉓ 熊野正也 1987『五領遺跡における外来系土器の検討』『駿台史学』第70号駿台史学会
- ㉔ 大村直 1982『V前野町式・五領式の再評価』『神谷原遺跡』八王子市市田遺跡調査会
- ㉕ 小出輝雄 1986『弥生時代末期から古墳時代前期にかかる土器群の検討』『土曜考古』第11号 土曜考古学研究会
- ㉖ 岡部修一『太田市における古墳出現期の様相』『群馬県における地域性』
- ㉗ 日本考古学協会編 1987『シンポジウム関東における古墳出現期の諸問題』学生社
- ㉘ 三沢正善ほか 1991『烏久保遺跡発掘調査報告書』小山市教育委員会
- ㉙ 前澤輝政・市橋一郎・柏瀬順一 1990『駒場遺跡第3次発掘調査』『平成元年度埋蔵文化財発掘調査年報』足利市教育委員会
- ㉚ 久保哲三 1990『第2編 大日塚古墳』『下野茂原古墳群』
- ㉛ 小森紀男 1988『古墳出現期における外来系土器の検討—栃木県内出土例を中心として—』栃木県考古学会誌第10集 栃木県考古学会
- ㉜ 本稿では「矢部遺跡」の寺沢氏分類に従ってここでは小形丸底埴ではなく、小形丸底鉢と称する。
- ㉝ 南河内町教育委員会 1992『南河内町史』
- ㉞ 小森紀男 1980『栃木県における五領式土器の研究』『宇大史学』2
- ㉟ 大川清ほか 1989『栃木県壬生町 宮の森集落遺跡群』壬生町教育委員会
- ㊱ 石坂茂ほか 1986『荒砥北原遺跡 今井神社古墳群 荒砥宮柳遺跡』群馬県教育委員会他
- ㊲ 田口一郎ほか 1981『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会
- ㊳ 岩淵一夫ほか 1984『赤羽根遺跡』栃木県教育委員会
- ㊴ 飯塚恵子ほか 1978『鈴ノ宮遺跡』高崎市教育委員会
- ㊵ 茨城県教育財団 1980『茨城県教育財団 文化財調査報告V』
- ㊶ 埼玉県遺跡調査会 1971『諏訪山貝塚 諏訪山遺跡 桜山貝塚 南遺跡発掘調査報告』
- ㊷ 茨城県教育財団 1987『主要地方道取手筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書 境松遺跡』
- ㊸ このような他地域からの影響として捉える考えではなく、「山形文」の簡略化としての「連弧文」という捉え方もあるが、大日塚古墳では43のような「連弧文」の壺の他に「山形文」をもつバレス

査も出土していることから考えると、両者はきちんと使い分けをされていたと考えられる。

- ⑥ 建設省中部地方建設局 静岡県教育委員会 清水市教育委員会 1985『下野遺跡』
- ⑦ 車崎正彦ほか 1984『御正作遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』大泉町教育委員会
- ⑧ 西川修一 1991『関東のタタキ甕』『神奈川考古』第27号 神奈川考古同人会
- ⑨ 山下誠一ほか 1986『恒川遺跡群』飯田市教育委員会
- ⑩ 柴田登 1984『青木、馬場第1・第2遺跡』静岡県豊田郡浅羽町教育委員会
- ⑪ 豊橋市教育委員会 1963『附載第二 次山遺跡』『瓜郷』
- ⑫ 赤塚次郎ほか 1984『勝川』愛知県教育サービスセンター
- ⑬ 岡市教育委員会 1979『重竹遺跡その1』
- ⑭ 田口一郎氏より御教授をいただいた。

图 版



(1) 調査区全景 (西より)



(2) 調査風景



(1) 1号墓完掘状態 (南より)



(2) 1号墓遺物出土状態 (西より)



(1) 1号墓遺物出土状態 (南より)



(2) 1号墓遺物出土状態 (西より)



(1) 1号墓壺出土状態 (南より)



(2) 1号墓壺出土状態 (北より)



(1) 1号基台脚部出土状態 (東より)



(2) 1号基台脚部出土状態 (北より)





(1) 1号墓高环出土状態 (西より)



(2) 1号墓小形甕・器台出土状態 (南西より)



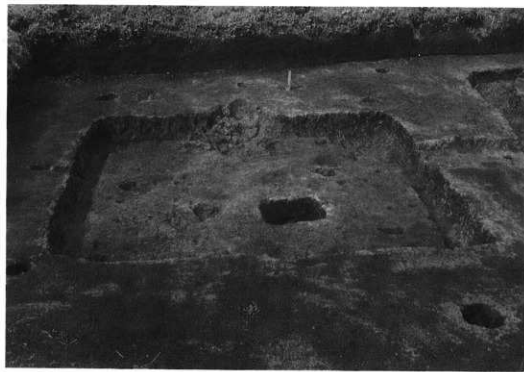
(1) 1号墓壘出土状態 (南西より)



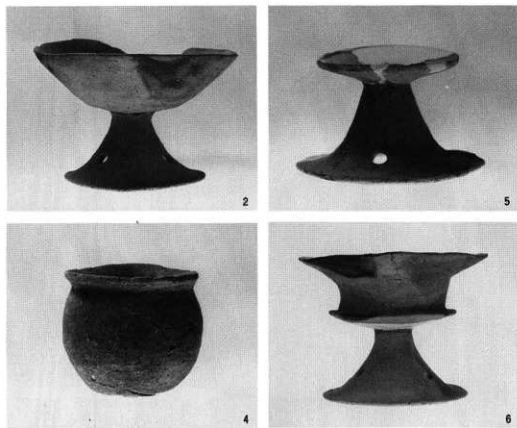
(2) 2号墓壘完備状態 (南より)



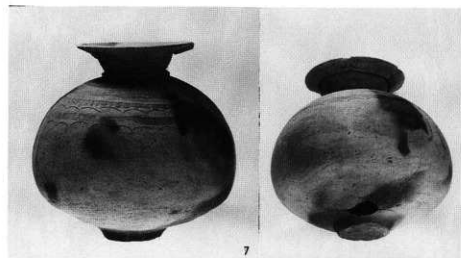
(1) 調査風景



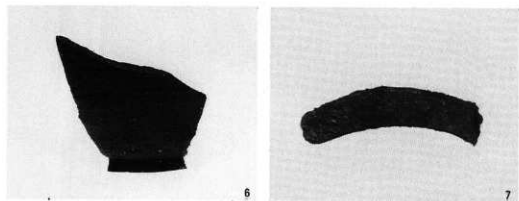
(2) S1-01完掘状態(南より)



(1) 1号墓出土土器



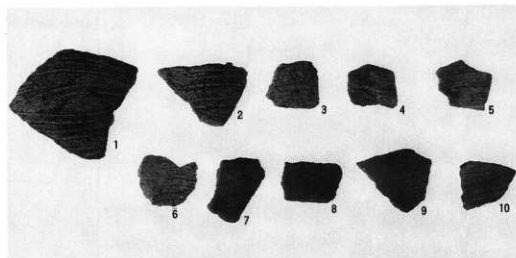
(1) 1号墓出土土器



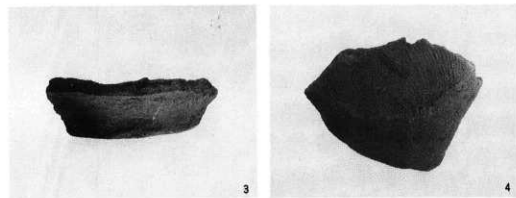
(2) S 1-01出土遺物



(3) 柱穴列跡出土遺物



(1) 炭探遺物 (縄文～弥生時代)



(2) 炭探遺物 (古墳時代以降)

---

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第32集

**牛 塚 東 遺 跡**

平成5年3月発行

発行 宇都宮市教育委員会文化課

(宇都宮市旭1-1-5)

TEL (0286) 32-2765

印刷 伴印刷株式会社

(宇都宮市栄町6番10号)

TEL (0286) 22-8901

---